

〔翻 訳〕

# メディチ家の彫玉コレクション

マリアリータ・カザローザ・グァダーニ  
松 本 典 昭(訳)

本稿は、Cristina Acidini Luchinat (a cura di), *Tesori dalle Collezioni mediche*, Firenze, 1997 所収の2本の論文, Mariarita Casarosa Guadagni, 'Le gemme dei Medici nel Quattrocento e nel Cinquecento', Id., 'Le gemme dei Medici dal Seicento alla fine della dinastia (1743)', pp. 73-92, pp. 93-102 の翻訳である。訳者が2章仕立てにし全4節に区分した。図版はスペースの関係で割愛したものも多いが、原文にはない図版番号を付すことで読者の理解の一助にした。博物館で都市名を記したもの以外は、すべてフィレンツェにある。なお本文中の明らかな間違いは訂正して翻訳した。

メディチ家といえば美術品のパトロン・コレクターとして有名であるが、工芸品のパトロン・コレクターとしての側面はほとんど知られていない。しかし、美術品と比べると工芸品は格段に高額であり、いかにメディチ家が工芸品に重要な価値をおいていたかが察せられる。本稿はメディチ家の知られざる側面に一条の光を投じるものである。

## I 15世紀と16世紀の彫玉コレクション

### I-1 コジモ・イル・ヴェッキオから

#### カトリーヌ・ド・メディシスまで

メディチ家は宝物を精力的に蒐集したが、なかでも彫玉は特別に重要なものと考えられていた。彫玉(ジェム)というのは、「インタリオ」(陰刻)と「カメオ」(陽刻)の総称のことである。メディチ家は都市の政治生活のみならず文

化生活にも絶対的な覇権を確立するうえで、彫玉の洗練された学究的趣味を涵養する必要があると感じていたのだ。彫玉は——正真正銘の古代品であれ紛い物であれ——古代のメダルや貨幣の蒐集と物理的象徴的に何世紀にもわたって関連してきた。なぜなら彫玉は、模範となる古典世界の倫理的歴史的芸術的諸価値についての視覚的例証と文化的情報をつねに提供してきたからである。

メディチ家は古代の貨幣と彫玉に加えて同時代のメダルと彫玉の蒐集にも力を入れた。その目的は単に財産を増やすためではなく、メディチ家の多くの人びとに共通する関心事項であった芸術を保護し奨励するためでもあった。だからこそ、珍しい作品を所有することで文化的な威信と権威を強調するような非公式の特殊な場においては、現代の彫玉と古代の彫玉がいっしょに並べて展示されたのである。

15世紀半ばの豊饒な人文主義サークルでは、古代の彫玉が熱心に探し求められ、高値で購入された。芸術家たちはその高度な技術を称賛し(とりわけインタリオは超絶技巧を要した)、学者たちはそのしばしば曖昧で難解な図像を考究した。

メディチ家の歴代当主がこれらの品々に強い関心を抱いてきたことは、フィレンツェの権力掌握を象徴する建造物すなわちラルガ通りのメディチ邸(現、パラッツォ・メディチ・リッカルディ)に如実に表れているといっても過言ではない。メディチ邸の中庭にめぐらされたアーチ上のフリーズに嵌め込まれた大理石製円形浮

彫8点は、古代のカメオとインタリオからモチーフを借用している。事実、円形浮彫の1点はメディチ家の最も有名な彫玉のひとつである玉髓製「ディオメデスとパラス」（ロレンツォの旧蔵品で、現在は消失したと考えられる）を再現したものである。これは人文学者のニコロ・ニコリが少年の首にかかっていたのを街路で偶然見つけて購入した彫玉である。1457年には宝石蒐集家としても名高い教皇パウルス2世（史料によれば、彼は同主題の別の彫玉2点も所有していた）が入手し、さらにその後、ロレンツォ・イル・マニフィコの手に移った<sup>1)</sup>。

中庭の大理石製円形浮彫は、1452年、マゾ・ディ・バルトロメオによって制作され、支払いは同年7月2日になされた。円形浮彫には彫玉の場が再現されたが、手本になった彫玉のうち「ダイダロスとイカロス」「アテナとポセイドン」「ディオニュソスとサテュロス」の3点は、1462年までメディチ・コレクションに入っていない。「凱旋車に乗るディオニュソス」「ディオメデスとパラス」の2点は、1471年にパウルス2世のコレクションからメディチ家が獲得した。「ケンタウロス」の1点は1492年にメディチ・コレクションに加わった。最後の1点「ナクソス島のアリアドネ」は、ゴンザーガ家の所有だった。

メディチ・コレクションの中核を創始したのは、コジモ・イル・ヴェッキオ（1389-1464）の息子ピエロ・イル・ゴットーゾ（1416-69）と孫のロレンツォ・イル・マニフィコ（1449-92）である。ロレンツォ自身の肖像はメディチ・コレクションのなかの魅力的なカメオ（銀器博物館）に刻まれている。しかし、1456年と1465年の財産目録によれば、彫玉の記載は約30点しかない。同時期の教皇パウルス2世が所有した彫玉が821点だったのに比べると、はるかに少ない<sup>2)</sup>。フランチェスコ・ゴンザーガ枢機卿やフィラレーテの覚書によれば、ピエロは彫玉を愛好する目利きの鑑定家だった。ピエロの古代カメオへの関心は財産目録からも明らかであ

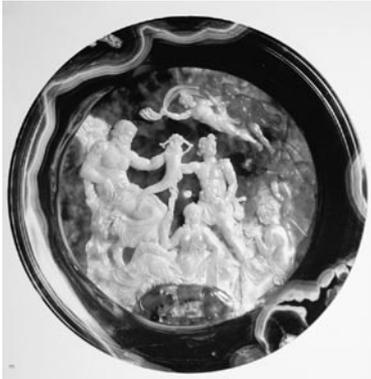
図1 「アテナとポセイドン」



り、たとえばピルゴテレス作とされる「アテナとポセイドン」（ナポリ、国立考古博物館）【図1】は、当時180フィオリーノの評価額がつけられているし、中世のカメオ「箱船への乗船」は最高額となる約300フィオリーノと評価されている<sup>3)</sup>。

メディチ家の彫玉コレクションが飛躍的に増大するのは、20年ほどのちの1471年、ローマでロレンツォ・イル・マニフィコが購入・受贈してからのことである<sup>4)</sup>。その年、ロレンツォは教皇シクストゥス4世の即位式に出席するために特使としてローマに赴き、古代品を満載して帰国した。フィレンツェに持ち帰った品々に関する記述のなかで、ロレンツォはある1点の皿について「われわれの皿」(la scudella nostra)と、あたかも先祖伝来の家宝だったかのように特別扱いをしている。それは現在、ナポリの国立考古博物館にある通称「ファルネーゼの皿」【図2】のことである。この直径約30センチの美しい玉髓製の皿は、紀元前180-150年のあいだにエジプトのアレクサンドリアで制作された。両面に精妙な彫りが施されており、凹面の多数の人物像はエジプトのプトレマイオス朝の権力と財力をたたえる複合的暗示的な寓意を表し、凸面にあるメドューサの頭はおそらくこの皿が宗教儀式用だったことを物語ってい

図2 「ファルネーゼの皿」



る。この皿がヨーロッパに到着し、ロレンツォの所有になる以前は、教皇パウルス2世、ナポリ王アルフォンソ・ダラゴーナ、シュワーベン公フリードリヒ2世が所有していた<sup>5)</sup>。ロレンツォの死後に作成された1512年の財産目録では、この皿は1万フィオーネという天文学的評価額を与えられているが、これはメディチ邸の資産総額の4分の1に相当する。

この玉髄製の皿のほかにも、ロレンツォは古代彫玉を多数獲得した。たとえば、ソストラトス作の銘のある愛らしい古典的なカメオ「ギャロップする2頭の馬を駆るニケ」(ナポリ、国立考古博物館)【図3】。この作品の図像は15世紀の芸術家に靈感を与え、さまざまなヴァリエーションの作品を産み出したが、とくに新プラトン主義思想の靈魂の不滅性の寓意的表現としてしばしば利用された。

「LAV. R. MED.」(ロレンツォ・デ・メディチのラテン語の頭文字)の銘が刻まれたカメオは43点あるが、その大半はパウルス2世の旧蔵品である。ロレンツォが頭文字の銘を入れたのは、自分が所有者であることを強調しようとする宿願の表れのようなのである。ロレンツォ・イル・マニフィコ(1499-1547)の死去から1年たらずの1495年2月、ミラノ出身の有名な宝石細工師カラドツォはメディチ家を訪問し、同家が所有する「ファルネーゼの皿」など名高い彫玉の数々について、ルドヴィコ・スフォルツァ宛に手紙を

図3 「ギャロップする2頭の馬を駆るニケ」



書いた。手紙に記されたのは、中庭の円形浮彫のところでも既述した有名な玉髄製インタリオ「ディオメデスとパラス」、そして他の2点のインタリオ「ネロの印璽」と「パエトンの凱旋車」である。「その日、私は皿を拝見しました。別の機会には、その皿といっしょに他の逸品を見せてくれましたが、それは玉髄製のネロの印璽とパエトンの凱旋車です」。1494年にフランス王シャルル8世がフィレンツェに入城し、ロレンツォの息子ピエロが追放の憂き目に遭ったとき、真っ先に安全な場所に避難されたのが、ほかならぬ「ファルネーゼの皿」とこの3点の彫玉であった。

いわゆる「ネロの印璽」は紅玉髄製で、アポロ、マルシユアス、オリュンポスが彫られていた。このメディチ家の所蔵品は、現在、ナポリの国立考古博物館にある紅玉髄製インタリオ【図4】と同定されている。制作したのは、ローマで皇帝アウグストゥスに仕えたギリシア人彫玉師ディオスコリデスとされる。石に彫られた「LAV. R. MED.」の頭文字が、ロレンツォ・イル・マニフィコの所有だった証拠である。紅玉髄製品が印璽——しかもネロ帝の印璽だったかもしれない——に関連づけられるのは珍しいことだが、それは、ロレンツォ・ギベルティが制作したドラゴンの形をした高価な金製縁飾りに刻まれた銘文に由来する。石を取り囲む金環のうえに、ネロ帝の名を刻したラテン語銘文があったのだ。この紅玉髄製品を再現した貴重なブロンズ製浮彫数点が現存するが、ギベルティが言及した縁飾りのラテン語銘文があるので、

図4 「ネロの印璽」



これらは原作に忠実な模刻だと考えることができるだろう<sup>6)</sup>。

最後の「パエトンの凱旋車」の彫玉もやはり、現在ナポリの国立考古博物館にある紅玉髓製品だと推定されている。これにも「ネロの印璽」と同様、底面にロレンツォの有名な頭文字が刻まれている。この紅玉髓製品は、1487年にロレンツォがルイジ・ロッチェ・ダ・バルベリーノと価格をめぐる押し問答をしたあげく、ローマの商人兼蒐集家ジョヴァンニ・チャンポリーニを介して150ドゥカートで手に入れたものと思われる<sup>7)</sup>。そうだとすると、同年、カラドツクか誰か彫玉師が、古代品ではなく現代品だと鑑定した紅玉髓製品ということになる。ロレンツォは多くの贈答品を受け取ったが、現代品でも、ときには古代品と偽った現代品でも快く受け取った。芸術的価値のいかんにかかわらず、ロレンツォが表現された主題とそこから派生する解釈に魅了されていたことは確かである。

事実、ロレンツォは自分が所有する彫玉を修復したり嵌め直したりするために彫玉師を雇っていたが、彼らが作った同時代のカメオとインタリオも購入することをためらわなかった。そして彫玉師たちには古代の難しい彫石技術を修得するように奨励した。ロレンツォは、アントニオ・ダ・ピサ、ピエロ・ディ・ネーリ・ラザ

ンティ（もしくはラッザンティ）ら多くの彫玉師をフィレンツェに招聘した。名匠ピエロ・ディ・ネーリ・ラザンティが教えた弟子のひとりにジョヴァンニ・ディ・オペレがいるが、このジョヴァンニの通称がジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレと呼ばれたのは、特に紅玉髓（コルニオーレ）のカッティング技術に秀でていたからである。ジョヴァンニは1470年頃に生まれ、1498年にフィレンツェの記録に初出する。ロレンツォが死去したとき、ジョヴァンニは弱冠22歳ほどだったから、現在、フィレンツェの銀器博物館に所蔵されている魅惑的な小さい紅玉髓にロレンツォの最も見事な肖像のひとつ（しかもロレンツォ自身が若いときの肖像）を彫った作者とするには若すぎる。しかし腕のよさは、ヴァザーリがジョヴァンニ作としている「ジロラモ・サヴォナローラの肖像」（銀器博物館）【図5】で実証済みである。これは16世紀の半ばになってメディチ・コレクションに加わった作品である<sup>8)</sup>。ジョヴァンニは、堅実な様式と明晰な線刻のために、同時代の著名人の肖像作家として比類ない名声を博した。

ジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレは、すでにフィレンツェ共和国のためにメディチ家の

図5 「ジロラモ・サヴォナローラの肖像」



宝石類の価格評価の仕事をしていたが、1513年、政府から別の重要な注文を受けた。「印璽に使う」紅玉髓にヘラクレスを彫る仕事で、一方の肩に棍棒、他方の肩に殺したライオンの毛皮を担いで闊歩する英雄像に仕上げた。ここでのヘラクレスはフィレンツェの神話上の建設者を表し、都市の市民的美徳を象徴的に表現している<sup>9)</sup>。残念ながらジョヴァンニが彫った紅玉髓製「ヘラクレス」は消失したが、少しのちの時代の別のインタリオがメディチ・コレクションに現存している<sup>10)</sup>。翠玉（エメラルド）のプラズマに伝統的図像の「ヘラクレス」（銀器博物館）が彫られているが、これはおそらくジョヴァンニの印璽に似ていたであろう。この現存する彫玉のほうは、1532年にドメニコ・ディ・ポーロが受注したものである。ヴァザーリはドメニコ・ディ・ポーロのことを何より「彫玉技術の名匠」で、ジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレの弟子と紹介している。

別のカメオは、華麗な純金の装飾と彩色エマールからロレンツォ時代のものであると思われるが、繁茂する月桂樹（ラウロ＝ロレンツォ）をあしらひ、ギリシア語の銘文はロレンツォのラテン語のモットー「semper viret」と同義語である<sup>11)</sup>。ロレンツォ・イル・マニフィコの死去は政治危機を招来し、1494年にメディチ家はフィレンツェから追放される。帰還するのは1512年9月14日のことである。追放時、メディチ家は宝石類を持ち出すことができたが、ロレンツォの息子ピエロは手許不如意のために3000ドゥカートを借りる担保としてアゴステイーノ・キージに宝石類の一部を預けざるをえなかった。したがって1496-1512年、メディチ・コレクションはローマのキージ銀行に保管され、ローマ在住の芸術家たちに大きな刺激を与えた。

つづく激動の時代はメディチ・コレクションの運命を激変させた。15世紀のメディチ家が築き上げた彫玉コレクションも千々に四散する。1527年の皇帝カール5世軍のローマ劫掠とイタリア蹂躞の後、メディチ家は再度フィレ

ンツェを追われ、彫玉類と他の貴重品はバッチョ・バンディネリに預けられた。1532年、教皇クレメンス7世が皇帝カール5世と結んで若いアレッサンドロ・デ・メディチ（教皇クレメンス7世の庶子）を最高統治者としてフィレンツェに押し付けたとき、メディチ朝の覇権確立が決定的になった。同年4月27日、メディチ家はフィレンツェの世襲統治者と宣言された。

初代フィレンツェ公アレッサンドロは、共和国時代のシンボルをすべて撤去し抹消するように命じた。政庁舎のブロンズ製の大きな鐘さえも溶解させ、そのブロンズは自分自身を記念するメダルに鋳直させた。そのメダルに酷似しているのは、淡黄色の背景に白い横顔が浮かび上がるドメニコ・ディ・ポーロ作の見事な玉髓製カメオ「アレッサンドロ・デ・メディチの肖像」（銀器博物館）【図6】である<sup>12)</sup>。

1537年1月、アレッサンドロ公は同族のロレンツィーノに刺殺された。この突然の事件で彫玉コレクションはまたも分散する。最高の価値がある大部分を引き取ったのは、アレッサン

図6 「アレッサンドロ・デ・メディチの肖像」



ドロ公の15歳の寡婦マルゲリータ・ダウストリア（皇帝カール5世の庶出の娘）の後見人を務める皇帝特使だった。1537年7月10日、マルゲリータはメディチ家所有のローマのパラッツォ・マダマに居を移し、かつてピエロとロレンツォの所有だった彫玉のほとんどをローマに持参した。そして翌年、オッタヴィオ・ファルネーゼと再婚した結果、ヘレニズム時代の玉髄製の有名な皿（通称「ファルネーゼの皿」）、ロレンツォ・イル・マニフィコの彫玉43点など多数の貴重品がメディチ家からファルネーゼ家の所有に移った。ファルネーゼ家が家系存続のために1735年にナポリに移住すると、コレクションも同時に運んだので、メディチ家の宝物はファルネーゼ家の宝物といっしょに現在もナポリにある<sup>13)</sup>。

16世紀初頭のコレクションで最高の一点は、水晶浮彫パネル付銀鍍金・エマール製「宝石箱」（銀器博物館）【図7】である。これは16世紀で最も有名な彫玉師ヴァレリオ・ベッリの作品で、1532年の年記がある。前述のように、教皇クレメンス7世はアレッシンドロをフィレンツェ公に就任させてメディチ覇権を確立したが、フィレンツェのみならずヨーロッパ規模での覇権確立にも心をくだいた。クレメンスは皇帝カール5世からメディチ支配の承認を勝ち取る一方、ウルビーノ公ロレンツォの娘カテリーナ・デ・メディチ（カトリーヌ・ド・メディシス、1519-89）をフランス王アンリ2世に嫁がせ、フランスとの関係も強化した。1532年の結婚に際してクレメンスがカテリーナに贈った

図7 「宝石箱」



図8 「カテリーナ・デ・メディチの肖像」



品が、キリストの生涯を水晶パネルに彫った上記の豪華な古典的「宝石箱」である<sup>14)</sup>。純白の玉髄製カメオ「カテリーナ・デ・メディチの肖像」（銀器博物館）【図8】に、われわれは少女時代の彼女の面影を見ることができる。

## I-2 コジモ1世から

### フェルディナンド1世まで

コジモ1世（1519-74）が1537年1月にアレッシンドロの後継者に選出されたとき、宝物コレクションはほとんど残っていなかった。新公爵は弱冠18歳の若者だったが、強い意志をもつ果敢な性格だったことは、水晶に彫られた「コジモ1世の肖像」（銀器博物館）【図9】からも理解することができる。彼はすぐに自己の地位を強化し覇権を掌握することで、都市の諸制度を刷新し、重要な都市建築プロジェクトを開始し、分散したコレクションを再構築していった。

コジモ1世は1537年に皇帝カール5世からフィレンツェ公の称号を授与されたが、その後も2つの重要な称号を得た。ひとつは1554年、皇帝カール5世から金羊毛騎士団員に任命されたこと、いまひとつは1569年、教皇ピウス5世からトスカーナ大公に任命されたことである。

図9 「コジモ1世の肖像」



新しく獲得した権力と権威を確固不動のものにするために、コジモ1世は巨大なカメオ「コジモ1世とエレオノーラ・ディ・トレドと子どもたちの肖像」(銀器博物館)【図10】を発注した。制作したのは、有名な彫玉師兼メダイオン制作者ジョヴァンニ・アントニオ・デ・ロッシ(1517-75)である。このカメオは大公の家族に「公的」なポーズをとらせることで古代の

図10 「コジモ1世とエレオノーラ・ディ・トレドと子どもたちの肖像」



巨大カメオの様式を模倣している。このカメオが、メディチ・コレクションのなかでも最高級品だけを収蔵する目的でウフィツィのトリブーナのために大公が作らせたキャビネットのなかに置かれていたことは、メディチ家の権力を誇示す意味でも象徴的である。ヴァザーリは『美術家列伝』第二版(1568年)でこのカメオについて述べているが、記述は不正確であり、かつカメオを取り囲んでいたはずの豪華な金製縁飾りには何の言及もない<sup>15)</sup>。

コジモ1世の妃エレオノーラ・ディ・トレドも高価なカメオとインタリオを購入して、減少していた本来のコレクションを補充していった。1556年、エレオノーラはローマ在住のルイジ・マイオーロを通して、巨大な紫水晶製「牧歌的場面」(考古学博物館)とカメオ「ソクラテス」(銀器博物館)を入手した。1562年には、ジョヴァン MARIA・ディ・ヤコポ・ヴェネツィアーノから金縁付き紫水晶製インタリオ「ヘラクレスの頭部」(考古学博物館)を購入した<sup>16)</sup>。同年10月7日、エレオノーラは、ガスパレ・ミゼローニを通して、美しいカメオ「フェリペ2世とドン・カルロスの肖像」(銀器博物館)の獲得に成功したが、このカメオは伝統的にヤコポ・ダ・タツツァの作とされている。同時期、可愛らしい古代のカメオ「クピドとプシケーの結婚」(ボストン美術館)【図11】を506ドゥカートで購入したが、これにはアウグストゥス帝に仕えたギリシア人宮廷彫玉師トリフォンの銘がある。このカメオは1572年以

図11 「クピドとプシケーの結婚」



前にセンチヌムの考古学的発掘により出土したもので、それをヴァチカンの商人が購入し、そこからトスカーナ大公のコレクションに移ったが、17世紀初頭には画家ルーベンスのコレクションに記録されているので、フィレンツェにあった期間は短かった<sup>17)</sup>。

1574年、フランチェスコ1世(1541-87)がコジモ1世のあとを継いだ。オカルト学と錬金術に没頭する新君主は、半貴石に無数の斑を入れることと着色することに魅了され、自分の趣味と嗜好にかなうに、半貴石を洗練された上品なオブジェに加工させた。フランチェスコ1世が特別情熱を傾けたのは偏愛する半貴石製容器の蒐集であったが、彫玉の蒐集にも熱をあげた。弟のフェルディナンド(1549-1609)がまだ枢機卿としてローマに滞在していたとき、ローマの骨董市に古代品、彫玉、貴重品が売りに出されると情報を収集させ、購入の価値があるかどうかを見きわめさせた。フランチェスコはまた私的な作品をローマの職人に注文した。たとえば1574年、ローマ在住の彫玉師ドメニコ・コンパーニに両親の追悼肖像のカメオ(銀器博物館)を発注している<sup>18)</sup>。

1575年、フェルディナンド枢機卿は、古今のカメオなど多数の貴重品が売りに出されたことを兄のフランチェスコに伝えた。売りに出したのは、ヴィテルボ司教セバスティアノ・グアルティエーロの相続人ジュリオ・グアルティエーロであった。大公が購入した宝石類のなかに、サイズと描写場面の双方で飛び抜けて重要なカメオが現存している。13人以上の人物と4頭の馬を彫った玉髓製カメオ「フェリペ2世

の凱旋」(銀器博物館)【図12】である。当時としては異例なことに、このカメオには彫玉師の名が「DNICVS ROMANVS」(ドメニコ・ローマーノのラテン名)と刻まれているが、これはローマ在住の彫玉師ドメニコ・デイ・カッメイの名で知られた人物の可能性が高い。ただし、この人物が前述のドメニコ・コンパーニと同一人物かどうかは不明である。このカメオは1556年にスペインとフランスの外交上の贈答品としてグアルティエーロ司教に贈られたものであろう<sup>19)</sup>。フランチェスコ1世はカメオを入手すると、手を加えようとした。幾分奇妙なことだが、大公はフェリペ2世の肖像を父コジモ1世の肖像に変更しようと決意し、彫玉師に変形を命じた。実際には変形は実施されなかったが、この記録そのものから明らかになるのは、既存のカメオやインタリオがしばしば思いつきで変形されることがあり、その結果、制作年や制作者の確定が非常に難しくなることである。

ローマ貴族ステファノ・アッリがフランチェスコ1世の関心を惹起した発掘品のなかに1点のカメオがあった。フランチェスコ1世が1574年、長い交渉の末に50スクードで獲得した瑪瑙製カメオ「ゼウス、ガニユメデス、ヴィーナス、鷲」(考古学博物館)【図13】である<sup>20)</sup>。売り手のアッリは当初カメオをフィレンツェに送ろうとしたが、すぐに心が変わり、鋳型を作る許可さえ拒否した。その後、大公の

図12 「フェリペ2世の凱旋」



図13 「ゼウス、ガニユメデス、ヴィーナス、鷲」



もとに送ることに合意したが、非常に厳しい条件をつけた。交渉内容と思わせぶりの売り言葉から、きわめて稀少な商品だと信じさせようと躍起になっていたことがわかる。

フランチェスコ1世は1583年頃、メディチ家の古銭、メダル、彫玉などのコレクションを収納する八角形聖堂型黒檀製キャビネットをベルナルド・ブオンタレンティに発注した。制作に約3年を要したこのキャビネットは、黒檀に半貴石が象嵌され、東方の雪花石膏製円柱、縞のある雪花石膏製角柱、そして鍍金を施した鱗でおおわれた円蓋がついていた。これはウフィツィ美術館のトリブーナと相似形であり、トリブーナの中央テーブルのうえに置かれた。54の大引出しと120の小引出しには、金銀銅のメダルが「瑪瑙、青玉、紫水晶など、陰刻か陽刻の施されたあらゆる種類の宝石」といっしょに整然と配列され、「その価値を計算しようにも際限がないし、その職人技を評価しようにも比肩しうるものがない」。

フランチェスコ1世は1587年に死去した。あとを継ぐために弟のフェルディナンドが枢機卿位をなげうってローマからトスカーナ大公として帰還した。1589年4月、カトリヌ・ド・メディシスの愛孫クリスティーヌ・ド・ロレーヌがフェルディナンドの花嫁としてフィレンツェに到着し、トスカーナ人は愛情をこめて大公妃を「マダマ（奥方）」と呼んだ。彼女は嫁資の一部として多数の宝石をフィレンツェに持って来たが、そのなかには祖母カトリヌがフィレンツェからフランスに持参していた宝石もたくさんあった。前述の有名なベッリ作水晶製「宝石箱」のほかにも、目録には多くの貴重なカメオが含まれている<sup>21)</sup>。

1571年から1587年までローマで暮らしたフェルディナンド1世も、数多くの貴重品を持ち帰った。たとえば、古代のトルコ石製「アウグストゥス頭部像」（銀器博物館）。これにはフェルディナンド1世が金細工師アントニオ・ジェンティーリ・ダ・ファエンツァに金製胸部を結合させた。金細工師リオナルド・フィアミンゴ

作の鷲とグロテスク仮面の金製縁飾りをもつカメオ「フェリペ2世の肖像」（銀器博物館）も、フェルディナンド1世の所有物だったはずである。しかし、フェルディナンド1世がメディチ・コレクションに加えた至高の一品は、歴代ローマ皇帝が所有するのにふさわしい1点のカメオである。それは直径14.2センチの瑪瑙製カメオで、アントニヌス帝が希望神に生け贄を捧げる場面が表現されていた<sup>22)</sup>。

ローマ在住のメディチ家代理人アルフォンソ・デル・テスタを介して、フェルディナンド1世とクリスティーヌは1587年にカメオ数点を購入した<sup>23)</sup>が、そのなかにはヴェスパシアヌス帝の頭部のカメオ（おそらく現在、考古学博物館にある美しいカメオ）も含まれていた<sup>24)</sup>。ジョヴァンニ・アントニオとドメニコ・デイ・カンメイ（「追憶の」と形容されているので、1587年にはドメニコはすでに没していたものと思われる）の2人もまた、大公夫妻のためにローマ皇帝の肖像カメオ12点を獲得した。もともと、それらは本来フェリペ2世への贈物になる予定だった。「それらはフェリペ王への贈物として制作された最初の12人の皇帝である。すべて緋色のビロードでおおわれた複数の小窓のある黒檀製宝物箱に整然と収められていた」。大公の代理人は60スクードで商談を成立させ、1576年の「グアルダローバ」の目録に記されているように、この一揃いが追加されたことで、すでに所有していた彫玉のメディチ・コレクションはいつそう充実した<sup>25)</sup>。

16世紀末にメディチ・コレクションはイタリアで最大級かつ最高級のものであり、他の複数のコレクションと違って、その地位はもう2世紀のあいだ不動であり続けた。

## II 17世紀と18世紀前半の彫玉コレクション

### II-1 コジモ2世からレオポルド枢機卿まで

フェルディナンド1世は1588年、半貴石細

工の制作を専門にする大公直轄工房をフィレンツェに創設した。この工房は都市でいちばん腕のいい石切職人を雇い、サン・ロレンツォ聖堂のモニュメンタルなメディチ礼拝堂の装飾を担当した。これは何十年もかかる大仕事だった。しかし、職人たちの仕事は礼拝堂の装飾だけに限ったものではない。小祭壇、祈祷台、聖遺物箱、キャビネットなどの調度品を飾る卓上板、浅浮彫、小像など、いろいろな種類の作品も、トスカーナ宮廷ばかりか外国の宮廷からも注文が殺到した。

かつて彫石師の仕事はきわめて個人的な性質のものであったが、いまでは、しばしば複数の多様な専門家がかかわる壮大な複合的プロジェクトの一部に組み込まれるようになった。

メディチ家の彫玉コレクションも、その創成期には古代的伝統一辺倒だったが、16世紀末以降になるともつと複雑になり、材質も産地も技術も多様になった。

事実、16世紀の第2四半期以降、半貴石はこの観点から評価されるようになっていた。その結果、鉱物(naturalia = 自然物)から工芸品(arteficialia = 人工物)への変容の実例として、彫玉の古さや高度な技術のみならず、その異例な外観が選択基準に加味された。独創的な主題や超絶技巧(mirabilia = 驚異)はもちろんのこと、とりわけ自然学的・鉱物学的特徴が珍重された。

フィレンツェの半貴石細工の新しい技術の好例は、各種の半貴石を組み合わせた魅力的な「大公コジモ2世の肖像」(銀器博物館)【図14】に見ることができる。また「大公コジモ2世とマリア・マッダレーナ・ダウストリア」(銀器博物館)の二重肖像を表す浅浮彫の紅玉髓製の彫玉は、大公直轄工房が到達した高度な技巧のまぎれもない証拠である。彫玉コレクションの何点かはウフィツィ美術館のトリブーナのキャビネットに保管されていたが、大多数はトリブーナの入口のどちら側かの壁にある秘密の戸棚に隠されていた。1630年代末にかけて、コジモ2世(1590-1621)の妃マリア・マッダ

図14 「大公コジモ2世の肖像」



レーナ(1587-1629)とフェルディナンド1世(1549-1609)の妃クリスティーン・ド・ロレーヌ(1565-1637)の遺産によって彫玉コレクションは増大した。

17世紀後半には、フランス王ルイ14世の従妹マルグリット・ルイズ・ドルレアンがコジモ3世(1642-1723)の花嫁としてフィレンツェに嫁いできたとき、嫁資の一部として多くの彫玉を持参したので、コレクションはさらに増大した。このときコレクションに加わった宝物のなかには、「天使に支えられたキリスト」(銀器博物館)【図15】という1400年頃の見事なカメオがあったが、これはパリ宮廷からもたらされた半貴石細工の稀少な作例である。この大型の作品はルネサンス期のフランス王室コレクションに最初に記録されており、当時は聖遺物箱の中心部分を構成し、そこから黄金の太陽光線が放射していた。これがメディチ・コレクションに入ったとき、エマーユ製花柄装飾の縁飾りがとりつけられた<sup>26)</sup>。

17世紀末には、大公フェルディナンド2世の弟レオポルド・デ・メディチ(1617-75)が遺言で残した古今の作品911点が追加されてコレクションはさらに増大した。レオポルドは

図 15 「天使に支えられたキリスト」



1667年に枢機卿になった人物で、熱狂的な美術品蒐集家として有名だった<sup>27)</sup>。彼が多くの代理人や友人と交わした往復書簡については、学者たちが綿密な検証を重ねており、彼の関心の幅広さを窺い知ることができる。彼の関心は古代彫玉を含む「古代品」に限定されることはなく、君主らしいコレクションにふさわしい価値の高い近現代の作品にまでおよんでおり、その幅広さが彼の自慢の種であった。

レオポルド枢機卿の彫玉コレクションは10年以上かけて築かれ、1670年にはすでに相当数に達していたはずである。なぜなら同年、レオポルド枢機卿は2人の古物商の専門家オッタヴィオ・ファルコニエーリとフランチェスコ・カメリに蒐集品の目録の編纂を依頼するとともに、蒐集品を収めるためにマルコ・ガンベルッチが設計した「宝石のためのキャビネット風」の戸棚の制作を監督するように依頼しているからである。

レオポルド枢機卿とローマや他都市にいる代理人との遣り取りから明らかになるのは、当時の古器物市場における活況であり、枢機卿自身の嗜好の方向性である。彼はとびきり美しいオリジナルの古代品を獲得しようとする一方で、並外れたサイズだとか石材や彫刻の稀少性や珍奇性といった理由で近現代の作品もコレクションに加えていった。彼は玉髓製カメオ「ティベ

リウスとリウィア」(考古学博物館)をめぐってデ・マッシミ枢機卿と激しく競り合ったが、これはメディチ・コレクションのなかでも極上の一品である。壊れていたので修復の必要があったが、130スクードで競り落とした<sup>28)</sup>。この取引の仲介者はコジモ3世の侍従のひとりパオロ・ファルコニエーリである。彼はローマにおけるレオポルド枢機卿付きの古物商オッタヴィオ・ファルコニエーリの従兄弟であった。パオロはカメオの情報を枢機卿に伝えただけか、その真価を見抜いていたので、次のように購入を強く勧めた。「もちろん、できるだけ安く手に入れるように努力しなければなりません。しかし、なにがなんでも手に入れる必要があります。なぜなら、これほど大きくて保存状態のいい代物は、いまではもう見つかりませんから」。

またオッタヴィオ・ファルコニエーリは「たまたまでくわした掘り出し物」をレオポルド枢機卿に推奨し、枢機卿は「ヘラクレス」(銀器博物館)という明らかに「現代の」カメオを購入した。この巨大カメオは、不思議な星(ステツラ)の形をした斑紋が表面をおおっている特徴から「ステツラリア」と俗称される石でできていた。彫玉は新しい作品でも認められた。「現代の作品ですが、石が珍しいのと細工がすばらしいので、閣下が入手される価値が十分にある逸品と確信いたします<sup>29)</sup>」。

彫玉の好事家で蒐集家でもある大修道院長アンドレア・アンドレイーニを通じて、レオポルド枢機卿は1673年、ドイツで作られた現代のカメオ28点をひとまとめにして購入した。それらは現在、ほぼすべて銀器博物館のメディチ・コレクションのなかに確認できるものである。それらがとりわけ興味深いのは、石に異様な斑がある点と主題に天才的な独創性が認められる点である。

1669年から1670年、ふたたびオッタヴィオ・ファルコニエーリの助言によって、レオポルド枢機卿はレオナルド・アゴスティーニ旧蔵の彫玉コレクションの全部とはいわないまでも大半を購入した。なかには比類なく美しい古代

品が数点含まれていた<sup>30)</sup>。レオナルド・アゴスティーニは17世紀ローマの文化界における大立て者である。カッシアーノ・ダル・ポッツォ、ピエトロ・ベッローリ、画家アンドレア・サッキと親交があり、スウェーデン女王クリスティーヌの図書館長でもあった。もとはスパルダ枢機卿に仕え、のちにフランチェスコ・バルベリーニに仕えた。1655年には、教皇アレクサンデル7世から大きな権限と名誉のあるローマおよびラツィオの古代品管理の最高責任者に任命された。

アゴスティーニは1657年、カメオとインタリオに関する書物を出版したが、これはよく売れて何度も版を重ねた。書物の中心部分は、当時の主要な複数のコレクションに保存された最も美しく魅力的な作品のなかから214点の彫玉を厳選して記述したものである。この書物のおかげで、われわれは選ばれた彫玉の線描画を見ることができるし、深い含蓄に富む図像の意味を探ることができるし、さらには彫玉の持ち主まで知ることができる。線描画はしばしば彫りの微小な細部まで再現しているが、残念ながら画面上正確とはいいがたい。アゴスティーニ自身が所有する彫玉数点も記載されているが、カメオの「ヘルマフロディトウス」(考古学博物館)、アッリオネ作「アポロ」(銀器博物館)、そして「マッシニッサ」と通称される戦士の頭部を彫った紫水晶製インタリオ(考古学博物館)などは、現在、メディチ・コレクションのなかに確認されている<sup>31)</sup>。

メディチ・コレクションに加わった他の彫玉のうち、以前の所有者がわかっているものに、ヴァレリオ・ヴィチェンティーノ作水晶製「健康女神に捧げられるヴェスタ女神に仕える巫女の生け贄」(銀器博物館)があり、これはもともとレオーネ・ストロツィの所有だった。また現在はパラッツォ・ピッティにあるものと同定される愛らしいカメオの「若いバッコス」(銀器博物館)は、かつてマリオ・ピッコロミニ枢機卿が所有していたものだった。メディチ・コレクションにもっとすばらしい古代彫玉

の数々が追加されたのは、大修道院長ピエトロ・アンドレア・アンドレーニ所有の彫玉を獲得したときである。この人物もローマの古器物界の大立て者で、レオポルド枢機卿のために彫玉や古代品を購入し、アゴスティーニと同じ文化サークルに出入りしていた。ピエトロ・ベッローリ、スウェーデン女王クリスティーヌ、オデスカルキの若君、ピエル・レオーネ・ゲッツィなど、ローマの多くの学者や蒐集家と親交があり、同時代人からは、彫玉の真贋や技巧の熟練度を一目で見抜くことができる「博識かつ勤勉このうえない彫玉の蒐集家」と目されていた。大修道院長のコレクションには、ナポリ、ヴェネツィア、ローマに滞在中に発見した真正銘の考古学的宝物や古代の宝石彫刻法の最上の作例が含まれていた。さらに重要なのは、古代彫玉の多くに銘が刻まれていたことである。そのために彫玉の価値と評価は高まり、多くの彫玉が盗まれる原因ともなった。

## II-2 コジモ3世から

### アンナ・マリア・ルイーザまで

大修道院長アンドレーニの死後数年経った1731年、メディチ家の大公ジャン・ガストーネ(1671-1737)が彼のコレクションから約300点の彫玉を購入した。しかし、それ以前からすでに何点かはメディチ家の所有になっていた。たとえば、プロタルコスの銘がある有名な玉髓製カメオ「ライオンに乗るエロス」(考古学博物館)【図16】は、アンドレーニの旧蔵品だった。フィリッポ・ストツィ(1724年)によれば、大修道院長アンドレーニはこの作品を贈物として大公に譲ったというが、別の証言によれば、盗まれて大公に転売されたという。ほかにアンドレーニの旧蔵品としては、オネスタの銘がある黄色いプラズマ製の「ミューズ」(考古学博物館)、やはりオネスタの銘がある紅玉髓製インタリオ「ヘラクレスの頭部」(考古学博物館)【図17】、マルカントニオ・サバティーニが所有したこともあるアガトプスの銘がある見事な藍玉(アクアマリン)製の「ポ

図 16 「ライオンに乗るエロス」



ンペイウス・セクストゥスの肖像」(考古学博物館), テウクロの銘がある紫水晶製の「ヘラクレスとイオレ」(考古学博物館), そして51カラットの藍玉(アクアマリン)に頭部が彫られた「マティディア」(考古学博物館)などがある<sup>32)</sup>。

18世紀の初頭, トリブーナに置かれたキャビネットには, 1300点の彫玉がヴェルヴェットを敷き詰めた32の整理箱に陳列されていた。その他の多くは, トリブーナの壁にある2つの秘密の戸棚に隠されていた。さらにそれ以外の彫玉は, 「美術館の随所に, 箱のなかや引出しのなかに乱雑に」保管されていた。だから1710年, 大公コジモ3世(1642-1723)は, すべてのコレクションを徹底的に整理整頓するように, 大修道院長アンドレイニと元老院議員フィリッポ・ブオナッローティに依頼した。その結果, 彫玉類は通称「メダルの間」に膨大な数のメダルや貨幣とともに整然と並べられた。

17世紀後半から18世紀初頭にかけて, 同時代の彫石師の手になる彫玉がメディチ・コレクションに加わった。彫石師アンドレア・ボルゴニョーネ(またはボルゴニョーニ, ベルゴニョーニともいうが, おそらくはフランス[ブルゴーニュ]出身なのであろう)は, 大公妃ヴィットリア・デッラ・ローヴェレに仕え<sup>33)</sup>, サン・ロレンツォ聖堂の聖体用祭壇のための2体の福音記者像をオラツィオ・モキと共同制作し

図 17 「ヘラクレスの頭部」



た<sup>34)</sup>。メディチ家とローヴェレ家の紋章が結合した八角形のトパーズ(かつて指輪に嵌め込まれていた)のインタリオ(銀器博物館)も, ラピスラズリの胸像(銀器博物館)も, 彼の手になるものであろう。大公が注文した両面に彫りのある碧玉は, 片面にメディチ家の紋章, もう片面にガリレオの衛星発見を暗示する5つ星をあしらった船の図像であったが, 現在は消失した。

アンドレアの息子フランチェスコ・ガエタノ・ギンギ(1680-1762)は, フォッジーニの指導のもとに大公の工房で兄弟たちといっしょに働いた<sup>35)</sup>。現存するギンギの作品は東方産の玉髓に彫られたカメオ「コジモ3世の肖像」(おそらく現在, 銀器博物館にあるもの)である<sup>36)</sup>。大公はこの作品にいたく満足したので彫石師に6ゼッキノを支払い, さらに他の大公たちの肖像制作の仕事を与えた<sup>37)</sup>。ギンギは半貴石に彫ったカメオの技法をフィレンツェの工房に再導入した人物と想像される。というのは, 次のように記されているからである。「彼は非常に苦勞してカメオの彫刻を始めた。工房には技法を教える人がいなかったからであ

る。父親だけが師匠ステファノ・モキが手がけた浅浮彫の小さい頭部を見せることで、わずかながら手ほどきを与えることができた」。

1737年、ギンギはフィレンツェを去ってナポリのシャルル・ド・ブルボンの宮廷へ赴くことにした。ブルボンはギンギを招聘し、彼の技術と経験をナポリの半貴石工房に広めようとしたのである。おそらく最後のメディチ大公ジャン・ガストーネの死去が、ギンギの決断を決定的にしたのだろうが、彼自身は次のように苦渋の回想をしている。「半貴石細工の技術をもつ師匠がいなくなったので、この分野は著しく衰退した。師匠も絶望の淵に沈んだ」。

メディチ・コレクションには、瑪瑙製「盾をもつピュロス」(銀器博物館)、赤縞瑪瑙製「クレオパトラ」(銀器博物館)、黄瑪瑙製「ミネルウア」(銀器博物館)など、何点かのガエタノ・トッリチェッリ作のカメオも含まれている。彼の作品は、豊かな陰影と縞模様のある、普通より大きいカメオに、深い彫りを施す高浮彫の嗜好を示している。ジュゼッペ・アントニオ・トッリチェッリ(1662-1719)は、世紀末に大流行する大公の「フォッジーニ風」の優れた考案者である。彼の作品には、マッシミリアーノ・ソルダーニ・ベンツィのメダイヨンの影響を受けたフィレンツェ・バロックの最も重要なカメオのひとつ(半貴石制作所博物館)<sup>38)</sup>があるが、もっともこの作品は彼の「ライバル」のフランチェスコ・ギンギの作とする説もある。トッリチェッリはまた、1714年に「宝石について」<sup>39)</sup>という題の論文を書き、「いとも高貴なるトスカーナ大公に仕えるミラノ人の流儀」で半貴石細工に使用する道具の線描画を載せた。この論文は、道具ばかりではなく、使用された石材の値段と産地など、じつに豊富な技術的情報を提供してくれる。

またメディチ・コレクションはカルロ・コスタンツィ(1705-81)作のインタリオを数点含んでいた。同時代人によれば、彼は父ジョヴァンニ(1664-1734)<sup>40)</sup>をも凌駕する優れた名工で、とりわけ古代品の模刻を作る専門家であっ

た。1731年、大公ジャン・ガストーネが美術館のために彼の彫玉23点をごっそりと購入したのは、彼の名声のほどを物語っている。メディチ・コレクションのなかのコスタンツィ作のインタリオで、現在確認されているのは2点だけである。1点は白サファイア製の「フィリッポ・ストッシュ男爵の肖像」(銀器博物館)、もう1点はトパーズ製の「教皇ベネディクトゥス13世の肖像」(銀器博物館)である。

ローマの有名な彫石師兼メダル制作者の家に生まれたジョヴァンニ・ハメラエニ(1649-1705)は、枢機卿ルドヴィコ・エマヌエーレ・ポルトカッレロ(1709年没)の肖像メダイヨンを模した魅力的な黒縞瑪瑙製の肖像カメオ(銀器博物館)の制作者と推定されている。

疑いなく18世紀前半には多くの彫石師が、大公への紹介を求めてフィレンツェに到来した。たとえば、ロレンツォ・ナッターは1732年から1735年のあいだにフィレンツェに来てフィリッポ・ストッシュ男爵に紹介され、古代彫玉の模刻の仕事に専念するよう励まされた。メディチ・コレクションには彼のインタリオが2点現存する。1点は彼の銘のある「ポンペイウス・シクストゥスの頭部」(銀器博物館)、もう1点は古代風ではあるが、彼に帰される「男の肖像」(銀器博物館)である<sup>41)</sup>。残念ながら彼が作った三面のトパーズは行方が知れない。それは、ジャン・ガストーネの肖像と頭文字とメディチ家の紋章を彫った作品で、最後のメディチ大公のために特別に作られたものだった。

1716年、プファルツ選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムの寡婦アンナ・マリア・ルイーザ・デ・メディチ(1667-1743)が所有する彫玉と公子フェルディナンド(1663-1713)の彫玉が加わったことで、メディチ・コレクションの正確な目録が必要になった。古代品への関心とフィレンツェの文化風土が後押しするかたちで、大公のコレクションに関する完全で詳細な目録の編纂の作業がおこなわれた。

アゴスティエーニが作成した目録は成功し、何度も改訂され増補された。それに続き、当時の

最も名高いコレクションから選ばれた銘のある見事な彫玉何点かを紹介したピカルト・ストツシュの目録が出版された(1724年)。一方、フィレンツェ人の学者でサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の参事会長でもあるアントン・フランチェスコ・ゴーリは、フィレンツェに数あるコレクションのなかでもとりわけメディチ・コレクションを図解した浩瀚な書物を編纂して出版した。最初の2巻が、メディチ家の彫玉に捧げられている(Gori, *Museum Florentinum*, 1731-32)。ゴーリの出版事業のおかげで、われわれはアンナ・マリア・ルイーザの彫玉コレクションの中核を知ることができる。なかでも際立っているのは、かつてピッコローミニ枢機卿の所有だった赤縞瑪瑙の地に金を施したカメオ(考古学博物館)である。

メディチ家の彫玉コレクションに関する手短な歴史の締めくくりとして、「アンナ・マリア・ルイーザ・デ・メディチの肖像」【図18】と「ヨハン・ヴィルヘルムの肖像」という夫婦の2点のカメオ(銀器博物館)を紹介しておこう。それは、赤縞瑪瑙の地に冠をいただく白色の縞瑪瑙の肖像が浮き上がる一対のカメオで、楕円形の金鍍金付きブロンズ製縁飾りで囲まれ

ている。その後、いろいろな歴史的変遷があったにもかかわらず、世界で最も膨大かつ完璧なコレクションのひとつを残した選帝侯妃へのオマージュである。

注

- 1) メディチ邸の中庭の円形浮彫の意味については、Dacos in *Il Tesoro di Lorenzo il Magnifico. Le Gemme*, Firenze, 1973, p.147 e nota 36.
- 2) 銀器博物館のメディチ・コレクション (Inv. Gemme, 1921 n.323.) のなかに、ジュリアーノ・ディ・シピオーネ・アミチが教皇パウルス2世の肖像を彫った巨大な紅玉髓がある。これは教皇が1470年4月19日付教皇勅書で布告した聖年の宣言を表したものである。この紅玉髓は、形体と図像の点でオリジナルの薄浮彫作品に関係している。頂点に渦巻形モチーフのある、広く盛り上がった装飾付縁飾りは、いまでは消失したオリジナルの縁飾りを模したものだとはずである。*L'arte degli Anni Santi, Roma 1300-1875*, Milano, 1984, n. VIII. 7; n. VIII. 8.
- 3) *Il Tesoro*, 1973, p.119. 「アテナとポセイドン」のカメオについては、*ibid.*, p.42, n.6. 「箱船への乗船」については、*ibid.*, p.64, n.37. 1462年にピエロを訪問したフランチェスコ・ゴンザーガ枢機卿の覚書については、*Il Giardino di San Marco, maestri e compagni del giovane Michelangelo*, Firenze, 1992, p.29, nota 12. 1464年頃に執筆したフィラレーテについては、*De Benedictis, Per la storia del collezionismo*, Firenze, 1991, pp.154-155.
- 4) *Il Tesoro*, Firenze, 1973; Giuliano, 'Ancora il tesoro di Lorenzo il Magnifico', in *Prospettiva*, 1975, N.2; Giuliano, *I cammei della collezione medicea del Museo Archeologico di Firenze*, Roma, 1989; Tondo Vanni, *Le gemme dei Medici e dei Lorena nel Museo Archeologico di Firenze*, Firenze, 1996.
- 5) この有名な玉髓製の皿については、*Il Tesoro*, 1973, doc. XI, p.120, p.69, n.43; Gasparri in *I Farnese, arte e collezionismo*, Milano, 1995,

図18 「アンナ・マリア・ルイーザ・デ・メディチの肖像」



- pp.134-135. これをフリードリヒ2世は1239年、1230金オンチャでプロヴァンスの商人から購入した。*Il Giardino di San Marco*, 1992, p.25, nota 16.
- 6) *Il Tesoro*, 1973, pp.55-57. 紅玉随製品と現存するブロンズ製浮彫のサイズの違いが次の研究書で指摘されている。*Piccoli bronzi e placchette del Museo Nazionale di Ravenna*, Faenza, 1985, n.12. いくつかのヴァリエーションのある模刻数点のうち、パリ国立図書館所蔵の高品質の紅玉随製品は15世紀のものと考えられる。*Il Tesoro*, 1973, n.41; Giuriano, *Ancora*, 1975, n.41, fig.5.
- 7) *Il Giardino di San Marco*, 1992, pp.22 ff. 1487年2月2日付書簡。
- 8) ジョヴァンニ・デッレ・コルニオーレ作の紅玉随製「ジロラモ・サヴォナローラの肖像」は、1565年に大公コジモ1世が購入して金縁に嵌め込まれたが、現在、金縁は消失。この作品の記録の初出は、1566年のグアルダローバの日誌(ASF, Mediceo, n.643, 1566年7月2日条。Giuliano, *I cammei della collezione medicea del Museo Archeologico di Firenze*, 1989, p.299.)である。302番には、「マゾッキオを冠る玉髓製のトレド家の紋章のまわりに2匹のハルピュイアが彫られた大きい金環」(Museo Argenti, Inv. Gemme 1921, n.350)があり、310番には、「小さい蛇が彫られた星形石」(id, no.1162)がある。
- 9) Collareta, 1986, p.292, nota 5. ギリシア語の銘文のある紫水晶製印璽は、18世紀初頭に大修道院長アンドレア・アンドレイニが所有していた。この印璽は、1496年にサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂に埋葬された彫玉師マルコ・タッシーニ作とされる。Giulianelli, *Memorie degli intagliatori moderni di pietre dure, cammei e gioie dal sec. XV al XVIII*, Livorno, 1753, p.125. 15世紀後半から16世紀前半に活躍した彫玉師には、ミケリーノ某、「紅玉髓彫刻師」ドメニコ・ディ・フランチェスコ・デルフィーニ、そして古代品の模刻者で浮彫師のピエール・マリア・セルバルディ・ダ・ペシア(1455頃-1550)がいる。この最後の人物はドメニコ・ディ・ポーロの師匠で、その名は、斑岩製小像「ヴィーナス」(Museo degli Argenti, in *Splendori in Pietre Dure, L'arte di Corte nella Firenze dei Granduchi*, 1988, n.1)と「レオ10世の肖像」(Museo degli Argenti, Inv. Gemme 1921, n.325)に刻まれている。
- 10) この印璽は現在パラッツォ・ピッティの銀器博物館蔵。Museo degli Argenti, Inv. Bargello n.30; McCrory, in *Palazzo Vecchio: committenza e collezionismo medicei, Firenze e la Toscana dei Medici nell'Europa del Cinquecento*, Firenze, 1980, n.280; Collareta, 'Il sigillo con l'Ercole del Museo degli Argenti', in *Rivista d'Arte*, 1986, XXXVIII, pp.291-293.
- 11) Museo degli Argenti, Inv. Gemme 1921, n.92; Gori, *Monumentum columbarium*, Firenze, 1731, II, p.75 n.5; Vasari-Milanesi, *Le Vite*, Firenze, 1880, vol. V, p.370. 同様の縁飾りのある他の彫玉については、Hackenbroch, *Renaissance Jewellery*, London, 1979, fig.165; Babelon, *Catalogue des carnees antiques et modernes de la Bibliotheque National*, Paris, 1897, n.464, fig. LV. ロレンツォのエンブレムについては、Dillon-Fantoni, in *All' Ombra*, 1994, pp.135 ff.
- 12) ドメニコ・ディ・ポーロのメダルについての詳細な研究は、Fox, 'Medaglie medicee di Domenico di Polo', in *Boletine numismatica*, 1989, NO. 10, pp.189-212.
- 13) *Il Tesoro*, 1973, p.7. このなかでパンヌーティはメディチ・ファルネーゼ・コレクションの歴史を詳述している。近年の研究では、Gasparri, 1994; C. Gasparri, in *I Farnese*, 1995, pp.132-151. 参考文献の概略は、*ibid.*, p.138.
- 14) 「宝石箱」はカテリーナがフランスに持参したが、1589年、クリスティーヌ・ド・ロレーヌの嫁資の一部としてフィレンツェに帰郷。ASF, Guardaroba Mediceo, n.152. 「宝石箱」については、C. Furlan, in *Ori e tesori d'Europa. Atti del Convegno di studio*, 1992, pp.323-337.
- 15) Vasari-Milanesi, *op. cit.*, 1880, vol. V, p.387; Poggi, *Rivista d'Arte*, 1916, IX, pp.41-48; McCrory, in *Palazzo Vecchio*, Firenze, 1980, n.279; *Splendori in Pietre Dure*, 1988, n.2.

- 16) フィレンツェの考古学博物館所蔵の紫水晶製「牧歌的場面」(Inv. n.14789) については, McCrory, 'Some gems from the Medici Cabinet of the Cinquecento', in *Burlington Magazine*, 1979; Tondo Vanni, *Le Gemme dei Medici*, 1990, no.35. 銀器博物館所蔵の「ソクラテス」のカメオについては, Inv. Gemme 1921, n.60. 考古学博物館所蔵の紫水晶製「ヘラクレス」(Inv. n.14856) については, McCrory, *Some gems*, 1979.
- 17) ルーベンスの所有以前はピッコ・リゴリオが所有していたかもしれない。ルーベンス以後はマールボロー公が所有。G. Nonni, 'Le nozze mistiche di Amore e Psiche: storia di una gemma ellenistica ritrovata a Sentinum nel XVI secolo', in *Studi umanistici Piceni*, 1995, pp.169-178.
- 18) Museo degli Argenti, Inv. Gemme 1921, n.11; *Palazzo Vecchio*, 1980, p.154, n.287; McCrory, 'Domenico Compagni: Roman Medalist and antiquities dealer of the Cinquecento' in *Studies in the History of Art Italian Medals*, 1987, pp.21, 115-129.
- 19) Tuena, 'Un episodio del collezionismo artistico del Cinquecento. La dispersione della raccolta del Vescovo Gualtiero', in *Mitt. Kunst. Inst.*, 1989, N.33, pp.85-104. カメオ制作者ドメニコ・ローマーノをドメニコ・デイ・カッメイすなわちドメニコ・コンパーニと同一視すべきだろう。McCrory, 1982; McCrory, 1987; *Palazzo Vecchio*, 1980, p.154, n.287.
- 20) Museo Archeologico, Inv. n.14436; McCrory, 'An antique cameo of Francesco I de Medici: an episode from the Grand Ducal Cabinet of anticaglie', in *Le Arti del Principato Mediceo*, 1980, p.312, doc. I; ASF, *Carteggio Artisti I*, ins. 24; Giuliano, 1989, n. I. 石についての描写を含む手紙 (ASF, *Carteggio Artisti I*, ins.37) があって, そこから, われわれはこの石がくだんのカメオと同一のものだということがわかる。
- 21) クリスティーナ・ド・ロレーヌの遺品については, ASF, *Guardaroba Mediceo*, n.152.
- 22) カメオの皇帝は, 18世紀にはユリアヌス帝, 19世紀にはアントニヌス帝, そして現在 (Tondo Vanni, 1990, n.270) ではユリアヌス帝かクラウディウス・ゴティクス帝 (後3世紀) も有力視され, 希望神への生け贄の場面とされる (McCrory, 1979, p.513; Giuliano, 1989, n.183)。フェルディナンド1世が大公に選出された際に彼の所有品目を列記したグアルダローバの目録には, 服飾品や高価な宝石とともにドメニコ・コンパーニ作彫玉付指輪が多数含まれている。ASF, *Guardaroba Mediceo*, n.79. anni 1571-1588.
- 23) Minucci del Rosso, 1885, pp.319-320 によれば, 彫玉類のなかには, 「ブルトウスの頭部を表す, じつに愛らしい宝石のついた金製指輪1点」や「アレクサンドロスの母オリンピア」を表す赤縞瑪瑙1点があった。
- 24) Museo Archeologico, Inv. n.14544. Giuliano, 1989, n.175; Tondo Vanni, 1990, n.248.
- 25) ASF, *Guardaroba Mediceo*, n.79, 'A' sul piatto, anni 1571-1588, c.25v.
- 26) Kahsnitz in *Das Goldene Rössl. Ein Meisterwerk der Pariser Hofkunst um 1400*, München, 1995, p.214, n.14.
- 27) レオポルド枢機卿とそのコレクションについては多数の研究書が刊行されている。とりわけフィレンツェ国立文書館に保管された『芸術家書簡集 (*Carteggio di Artisti*)』の数巻の出版物 (フィレンツェ大学とピサのスクオーラ・ノルマーレ・スペリオレの編纂) は, 蒐集家としての枢機卿の関心について有益な情報を提供してくれる。Giovanni, 'Notizie sulle medaglie della collezione Agostini aquisitate dal Cardinale Leopoldo de' Medici', in *Rivista italiana numismatica*, 1979; Giovannini, 'Lettere di Ottavio Falconieri a Leopoldo de' Medici', in *Carteggio dei Artisti dell' Archivio di Stato di Firenze*, Firenze, 1984; Fileti Mazza, *Il Cardinale Leopoldo de' Medici*, Firenze, 1989, vols. I-II.
- 28) この見事なカメオについては次を参照。Casarosa, 'Collezioni di gemme e il Caldinale Leopoldo de' Medici', 1976, p.61; Giuliano, I

- cammei della collezione medicea del Museo Archeologico di Firenze*, Roma, 1989, pp.234-235, n.159. パオロ・ファルコニエーリがこのカメオを発見し、デ・マッシミ枢機卿ではなくレオポルド枢機卿に売却することにしたが、その際にパオロは自分が古代品を売買する公的な権限を与えられることを要求した。それというのも、多数の規制が市場を支配していたにもかかわらず、ローマには美術品の闇市場が存在していたからである。
- 29) このカメオはたぶん16世紀のもので、現在、フィレンツェの銀器博物館に所蔵されているものであろう。*Carteggio* XI 1670, n.282; Casarosa, 1976, p.56; Giuliano, 1989, n.80.
- 30) アグステイーニについては、Giovannini, 1984, p.202 ff.
- 31) 「マッシニッサ」については、Casarosa, 'Variazioni su Massinissa', *Prospettiva*, 1989-90, N.57-60, pp.358-362. 盗品については、Gori, *Monumentum Colombarium*, 1727, p.115.
- 32) コレクション全般と特にアンドレイニの彫玉コレクションについては、Battista, 'La collezione di gemme dell'Abate Andreini', in *Antichità viva*, 1993, xxxii, n. I, pp.53-60. エトルリアの古代品の蒐集については、*L'Accademia Etrusca*, 1985, p.110, p.140, nota 34. プロタルコス作のカメオ「ライオンに乗るエロス」については、Giuliano, 1989, n.34. オネスタの銘がある紅玉髓製「ヘラクレス」については、Tondo Vanni, *Le gemme de' Medici e de' lorena nel Museo Archeologico di Firenze*, Firenze, 1990, n.129. テウクロの銘がある紫水晶製「ヘラクレスとイオレ」(Tondo Vanni, 1990, n.29) は、アンドレイニから盗まれてアンドリュウ・フォンテーヌに売られたが、結局、もとの所有者に返還された (Bttista, 1993, pp.56-57)。フルヴィオ・オルシーニの旧蔵品で現在は失われたソロンの銘がある「マエケナス」については、マルティネッティ・コレクションの品目に関する次の本を参照。*Il tesoro*, Milano, 1990, p.61, n.36. グナイオスの銘がある紫水晶製「棍棒をもつヘラクレス」は、もともとフルヴィオ・オルシーニの所有だったが、その後、レオーネ・ストロツィの手に渡り、現在はロンドンの大英博物館蔵。これらはすべて見事な古代品である。フィリップ・ストッシュによれば、アンドレイニのコレクションには、ポリクレートの銘がある紅玉髓製「ディオメデスとパッラディウム」、紫水晶製「ヘラクレス」(これはフィレンツェ共和国の印璽に酷似している) も含まれていた。
- 33) Gulianelli, *Memorie degli intagliatori moderni di pietre dure, cammei de gioie dal sec. XV al XVIII*, Livorno, 1753, p.59, pp.138-139. ボルゴニョーネの著書 (*Adversaria, sive Adparatus pro Historia Glyptographica*) には、大公ゴジモ1世時代以降の注文と支払いに関する全記録が含まれている。Aldini, *Institutioni Glittografiche*, Cesana, 1785, p.110 には、彼の作品の多くが大公の美術館に保管されていると記述されている。大公妃ヴィットリア・デッラ・ローヴェレのためには、ルビーに2つの髑髏を彫った。大公妃は宗教作品の熱烈な愛好者だったので、ボルゴニョーネは彼女のために「各種の石に聖母マリアと天使」を制作したが、それは貴石細工製作所美術館にある聖水盤に嵌め込まれた2点のメダイオン (Inv. 1905, n.515) だった可能性が高い。
- 34) Giulianelli, 1753, pp.138-140; *Splendori di pietre dure. L'arte di corte nella Firenze de' Granduchi*, Firenze, 1988, n.25.
- 35) ギンギについては、Giulianelli, 1753, p.146. ギンギの自伝については、Gonzalez Palacios, 'Un autobiografia di Francesco Ghinghi', in *Antologia di Belle Arti*, 1977, N.3, pp.271-281.
- 36) マッシミリアーノ・ソルダーティ・ベンツィの1684年頃のメダイオンによく似たこのカメオについては、次を参照。Palacios, 1977, pp.273-274; Langedijk, *The portraits of the Medici*, Firenze, 1981, I, n.124. パラシオスは大公を表した他の肖像 (Museo degli Argenti, Inv. Gemme 1921, n.1166) もギンギ作としているが、たぶんもっと古いものであろう (Palacios, 1977, pp.273-274; Langedijk, 1981, n.125)。ギンギ自身が記すには、

- 翠玉でアンナ・マリア・ルイーザの肖像 2 点, 彼女の父コジモ 3 世の肖像 1 点 (Langedijk, I, p.207), そして彼女の夫プファルツ選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムの肖像 1 点を制作した。
- 37) ギンギが1720年頃に制作したインタリオのひとつは、大公コジモ 3 世の「79 歳」の肖像であるが、これはフィレンツェのマルチェッリアーナ図書館に保存された写しによって知られる (Marucelliana Ms. A.51, c.6 in Langedijk, 1981, I, n.129)。
- 38) *Splendori*, 1988, n.45. 確証はないが、このカメオは伝統的にトッリチェッリの作とされる。Giulianelli, 1753, pp.147-148 は、トッリチェッリの作品としてトパーズ製「ソロンの頭部」、瑪瑙製「ファウヌスの頭部」、クレオパトラ、紅玉随製「アンティノウス」、小ファウヌス」をあげている。Aldini, 1785 もトッリチェッリの顧客を列記し、なかには黒い背景の壁龕にいる「バ
- ッコス」を注文したストッシュ男爵が含まれている。ホレイス・マンのためには、メダイオンを模した「アンティノウスの頭部」を制作した。
- 39) マニユスクリプトは、Kunsthistorisches Institut di Firenze, V.825 d. に保管されている。
- 40) カルロとジョヴァンニのコスタンツィ父子については、同時代のさまざまな史料に言及している Giulianelli, 1753, pp.62-63, p.144, p.162. もっと最近の研究書としては、Pirzio Biroli, 1984. 「ストッシュ男爵の肖像」、[「教皇ベネディクトゥス 13 世の肖像」]については、Casarosa, 1973.
- 41) ストッシュ男爵の肖像 3 点 (うち 2 点はエルミタージュ美術館蔵) を制作したナッターについては、Nau, *Rorenz Natter*, Siberach, 1966; Kagan-Neurov, 1984.

(2008 年 11 月 28 日掲載決定)